

先週は市場メカニズムと、市場の失敗についてやった。それで市場メカニズムのところではパレート最適をやった。そこで、補助金は国民的損失になると話した。前回は市場の失敗の例として公共財の話をした。外部効果の一部を話したが、今回は外部不経済の話を図で説明する、ちなみにパレート最適とは経済がもっとも効率的な状態のことをいう。これは、競争すればパレート最適に至るということなのだが、これは厚生経済学の第一命題である。そしてこれがグローバリゼーションの基になっているのである。しかし、競争が望ましくない場合があって、それが市場の失敗である。経済学はアダムスミス以来、自由放任が一番望ましいというスタイルできた。このことを証明したのがワルラスである。さっき言った第一命題をもっとも現実的に証明したのがアローという人。

外部不経済の話を先週したが、図に示したように（メモ参照）、供給曲線と需用曲線を描く。そして、その供給曲線を企業の供給曲線であるとする。縦軸は価格、横軸は生産量・消費料。そして均衡点が存在する。ところが、この企業が生産するにおいて、公害を生み出す場合は、その分コストがかかることになる。すると社会の供給曲線は公害分を足した少し上の緑のラインになる。まず、区分によって ABCDE に分ける。企業が公害対策をやらずに政府に処分させた場合には F の分だけ損失になるということを証明したい。

社会の供給曲線と需要曲線だけだと均衡点は通常よりも上になる。すると A の分だけ消費者余剰が生まれることになる。ということで消費者余剰は A。そして生産者余剰は、B+C になる。すると、これらの合計 A+B+C が社会的に望ましい量ということになる。

ところが、政府が存在しなくて、企業の供給で生産したとすると、さっきの均衡点よりも下の均衡点になる。そうすると、消費者余剰は A+B+D、生産者余剰は C+E になる。すると、合計すると、A+B+C+D+E になり、さっきのよりも大きくなる。しかし、公害の分のマイナスがあることを忘れてはならない。その分は、E+D+F である。その分マイナスになるので、さっきの社会的余剰から差し引きすると政府がない場合の社会的余剰は A+B+C-F になる。

よって両方の社会的余剰を差し引きすると -F になり、この分だけ社会的には損失になっていることになる。なので、最近食品問題が盛んだが、問題を気にしないで作り続けると、生産量は増えるかもしれないが、社会的にはマイナスになってしまうのである。なので政府はそういう問題に対しては規制していかなければならないということだ。

では政府は何をしたらいいのか？その損失分、公害によって増えるコスト分を企業から税金で取ることになる。すると企業が負担するコストは増える結果となり、これはなかなか良い方法である。すると均衡点が上になるので、生産量は下がる結果となる。まあ生産コストが上がるので当然のことだろう。なので、政府が企業に税金をかけることによって、均衡点が上に上がり、生産コストが上がったことによって生産量も下がるが、社会的な損

失はなくなる。

しかし問題もある。この税金いくらかけるだろうか。昔は化学薬品などを垂れ流しにしていたが、その影響で水俣病や様々な公害問題に発展したが、その問題の解決には安住年もかかるわけだし、実際いくらのコストになるのかなど測ることはできない。それが非常に難しい問題である。

アダムスミスは自由放任よりも市場の失敗についていいかかったんだという説もある。例えば警察や消防、公園などである。つまり、いくら市場だとかいっても、国家でなければできないような供給物だってあるだろうということをスミスはいいかかったのではないかという説があるのである。この流れをもっともよく受け継いでいるのがアメリカである。なので、アメリカの大統領はアホみたいに自由民主主義とか、デモクラシーだとか、繰り返しているわけである。しかし、ここ何週間か大騒ぎして、AIG という会社にお金をつぎ込んだ。

経済学は特に金融の分野で役に立っていない。その中でも金融における心理の分野において解けていない。ケインズが経済学は心理だといっていたのだが、未だに人間心理を入れた経済学派はできていない。

もう一つ問題があってリーマンは倒産させたが AIG は救ったけど、これはどうしてなのか。これを市場のメカニズムと市場の失敗で解釈しなければならない。AIG を救った理由は、世界中に保険会社があり、これを潰してしまうと世界中がパニックになってしまう。つまり AIG を一つの公共財であると考えるのである。世界中の人の利益を救うために AIG は救ったのであるというのが一つの理由。

ここ数日で株価は急落している。関係なかった。

パレート最適などの概念はミクロ経済学から成り立っている。なので、例えばガーナという国がある。ガーナといえばココアなのだが、金もあるし、木材もある。この時にガーナの経済が、これらで成り立っていたら、もっとも影響を受けるものは何かというと、金融なのである。これらの生産物の値段はどこで決まるのかというと、ニューヨークの金融取引市場で決まるのである。石油価格もここで決まっている。そうすると、ガーナの人の生活がニューヨークで決まることになる。それはおかしいといって 9・11 テロを起こしたのがオサマ・ビンラディン氏である。世界貿易センタービルは市場メカニズムの象徴だったので、標的になったのである。

競争と国についてミクロ経済の観点で説明しようと思う。それで、開発経済学ということをして先生の授業ではやっているが、テキストブック開発経済学というのが、有斐閣から出ている。これは買わなくていいです。この本の趣旨はミクロ刑事あがくとマクロ経済学をしっかり勉強してくださいということです。ミクロは企業と家計がベースになる。企業は生

産関数。家計は効用関数。

まずは生産関数は何なのかについて考えることが大事。 $Y = 3K^{\alpha}L^{1-\alpha}$

10 エーカーの土地で労働者を増やしていき、産出量がどれだけ出てくるかを調べると、一人の時は10、二人の時は24、3人の時は39となった。ここで問題。式で表すことはできるか。たぶんできないだろう。10・20・30とかの単純な数だったらできるだろう。 $Y = 10X$ となりこれが単純な生産関数? となる。